

日本認知言語学会論文集

第9巻

Proceedings of the Nineth Annual Meeting of
the Japanese Cognitive Linguistics Association

Vol. 9

JCLA
2009

目次

研究発表

口頭発表

中国語母語日本語学習者の事態把握		
一日中対照予備調査の結果から—	近藤安月子、姫野伴子、足立さゆり	1
〈容器〉のスキーマと中国語“NP+里”の意味拡張	韓濤	12
日中両言語に基づく数量類別詞の認知的分析	屈莉	23
Cross-linguistic Support for Polysemy Analyses: The Case of English <i>through</i> and Three Japanese Verbs (<i>tooru</i> , <i>nukeru</i> , and <i>toorinukeru</i>)	Carey Benom	34
直示動詞「行く」「来る」の意味獲得—usage-based modelの観点から—	高梨美穂	38
プロトタイプとスキーマによる「XとしてのY」の解釈	大西美穂	49
アイロニーのインパクトは言葉でどのように造形されるのか	西谷工平	60
会話における話題の「逸脱」に関する考察		
—「試行的」な伝達を含む会話の展開分析—	名塩征史	70
イントネーションの言語変化に見る上昇調の機能拡張について	久保田ひろい	81
日本語の動詞反復表現—「VてもVても」「VにはV」を例として	野呂健一	92
主体的態度表現と時制辞	片岡宏仁	103
日本語の文において名詞句の語順が動詞の語義解釈に及ぼす効果	中本敬子	114
認知主体の視点と価値付与の反転:		
英語不変化詞 <i>up-down</i> 、 <i>in-out</i> 、 <i>on-off</i> を例にして	大谷直輝	121
「Vてみる」の多義性と文法化	嶋田紀之	132
構文的多義ネットワークにおける並列型及び補文型複合動詞の位置づけ	野田大志	143
理解時間計測による名詞メタファーと		
形容詞メタファーの理解過程の比較	坂本真樹、内海彰	154
助数詞のメタファーに基づく使用に関する一考察	濱野寛子、横森大輔、鈴木一平	163
MUSIC<音楽>に関わるメタファーについて	歳岡冨香	172
9つの言語における「共感覚的比喩」		
—「視覚を表す語」と「触覚を表す語」を中心に	武藤(酒井)彩加	181
Analysis of Experimental Poetry Using Blending Theory: A Case from Concrete Poetry	水野真紀子	192
根源的用法の <i>must</i> のプロトタイプ効果: 発話行為とICMの観点から	眞田敬介	203
「ノダ」の既定性—記憶モデルの観点から—	中野友理	214
トートロジーと全称命題	酒井智宏	225
トートロジーからみた知識構造と談話構造	古牧久典	236
英語関係節の認知的考察—制限的、非制限的用法の合成経路—	野坂雄二	247

Unsaturated Head Nouns and Relative Clauses in Japanese	山泉実	258
日本語とカザフ語のオノマトペの対照研究		
一擬態語の語末の撥音「N」を中心に一	サディグル・エルドス	269
新造オノマトペの創発とその動機付けに関する考察	井上加寿子	278
擬態語は前言語(プロト・ランゲージ)か?		
～脳機能イメージング研究からの示唆～		
荒田真実子、今井むつみ、奥田次郎、岡田浩之、松田哲也		289
オノマトペ的表現と対話能力発達の間わりについて		
一日韓養護学校の授業における運用事例観察を通して一	有働真理子、高野美由紀	298
中間構文の習得からみた構文文法的再考	谷口一美	309
動詞・形容詞の否定形のインプットの頻度と習得との関係	森山新、ナイダン・バヤルマー	320
歴史英語における語順確定と主語の情報連鎖機能に関して	柴崎礼士郎	328
Can Ikegami's Typology of DO- vs. BECOME-Languages Go beyond English-Japanese Contrastive Linguistics to be a General Framework for Semantic Typology? An Investigation of the Semantic Structures of Sidaama(Sidamo), a Cushitic Language of Ethiopia	河内一博	339
「形容詞-ク」形の機能について一参与者志向性の再評価一	浅井良策	350
「『～しか…ない』構文」の認知言語学的分析	山本幸一	361
移動表現における非主要部の従属度と類型の段階性	守田貴弘	372
液体移動に関わる経路・様態表現の意味の拡張範囲	鈴木幸平	383
フランス語の「目」に関する熟語とメタファー表現		
一認知的基盤と外国語教育への応用可能性一	治山純子	394
身体性にに基づくイメージ拡張:		
STRAIGHTNESSとCROOKEDNESSに関わるメタファーを材料として	寺西隆弘	404
慣用表現の変形操作とその動機づけ		
一「目/手」を含む慣用表現の関係節化を例に一	土屋智行	415
概念メタファー理論と構文文法の統合、およびその含意	大石 亨	426
ポスターセッション		
コーパス分析と認知言語学	李在鎬	437
異なる周波数帯域を含む言語の聞き取りに音楽経験が与える影響	中村智栄	444
構文はなぜ知覚可能か?: 構文知覚のメカニズムを共起強度に求める試み	吉川正人	451
(容認度の低い例の) 作例を効果的に行なうためのツールの紹介	黒田航	458
比喩文の適切性評価に関わる主題と喩辞の認知	平知宏・楠見孝	465
動作場面の名詞化と2つのスキミング	川島 嘉美	472
移動動詞の文法化の通時的考察一「連用形+V」の形を中心に	百留康晴、百留恵美子	479

五感のダイクシス—知覚主体と刺激の関係の身体性— 句動詞における不変化詞UPとDOWNのコーパス分析 —Collexeme Analysisによるアプローチ—	高嶋由布子	486
視点変化が左右の指示領域に及ぼす影響	松村正寿 小島隆次	493 500

特別講演

Item/System: Language from Mind to Population	N. J. Enfield	507
---	---------------	-----

シンポジウム

認知言語学の基本理念を再考する—〈外〉との対話を通して	司会: 野村益寛	521
事件は現場で起きている—使用依拠モデルからみた〈意味〉と〈言語習得〉	野村益寛	524
語用論から認知言語学を見る	加藤重広	535
形式意味論と認知言語学	白井賢一郎	551

ワークショップ

The Perfect Mix: Cognitive Linguistics Meets Historical Linguistics	代表: 樋口万里子	562
Family Networks and the Development of the Perfect in Early Modern English	Bridget Drinka	563
The Have/Be Perfect in Late Modern English	水野和穂	567
The Semantic Structure of the English Present Perfect Progressive	樋口万里子	571
〈イマ・ココ〉にこだわる日本語話者の「語り」	代表: 守屋三千代	575
日本語話者の「語り」と「読み」	守屋三千代	576
「語り」と「読み」の諸相: 近現代文学と「語り」	高山京子	580
〈事態把握〉と「語り」をめぐる日中両国語話者の相違—「笑い」を中心に—	梁爽	584
コメント	池上嘉彦	588
主観性—認知発達とメタファーとの関連から—	代表: 鍋島弘治朗	591
言語学における主観性研究: Langackerの議論を中心に	深田智	592
乳幼児の空間認知における自己中心的反応	杉村伸一郎	596
認知言語理論におけるイメージ・スキーマと主観性 —発達理論およびメタファー理論との関連から—	鍋島弘治朗	600

Situating <i>Self</i>, Expressing Emotions, and Quoting Thought:		
What Narrative and Face-to-face Conversational Data		
Reveal about Cognition, Culture, and Language	代表:堀江薫	604
Discussion: On the Possible Transformation of Cognitive Linguistics	大堀壽夫	605
A Study of the Situation of <i>Self</i> in the Interaction of Conducting of		
Problem-Solving Tasks: A Difference between Japanese		
and American Pairs	藤井洋子	608
What Is the Story About? Quotations in Japanese and American English		
Narratives from a Cross-Linguistic Perspective	野村佑子	612
Expressing Emotions with Deixis: A Case of Japanese Adnominal		
Demonstratives <i>Konna/Sonna/Anna</i>	成岡恵子	616
Discussion of Papers	N. J. Enfield	620

トートロジーと全称命題

酒井 智宏

(慶應義塾大学非常勤)

madara@tky.3web.ne.jp

1. 本論文の目的

多くの先行研究において、(1)のようなトートロジー「XはXだ」の解釈は全称命題(2a)ないし(2b)と結び付けられている。

- (1) a. 戦争は戦争だ。
b. ねずみを取らなくても猫は猫だ。
- (2) a. $\forall x [X(x) \rightarrow X(x)]$ (「すべてのXはXだ」)
b. $\forall x [X(x) \rightarrow Q(x)]$ (「すべてのXは何らかの属性Qを持つ」)

本論文では、トートロジー「XはXだ」を全称命題と直接結びつけるアプローチの不備を指摘し、自然言語の文がそれ自体ではいかなる命題も表さないとするコンテキスト主義的な考え方(Fauconnier 1985, 1997, Recanati 2004, etc.)に基づく分析を提示する。

2. トートロジーを全称命題と結び付ける研究

本節ではトートロジーを明示的に全称命題と結び付けている研究をいくつか挙げる¹。ここでの目的は、それぞれの研究の内容を検討することではなく、これらの研究の間に見られる「全称命題によるトートロジー解釈の記述」という共通点を明るみに出すことである。

2.1 Jespersen (1924)

Jespersen (1924: 154)はトートロジー(3a)を(3b)のようにパラフレーズしている。(3b)は上の(2a)型のトートロジーである。

- (3) a. Children are children.
b. "(All) children are among the beings characterized as children." [(2a)型]

2.2 Levinson (1983)

Levinson (1983: 111)はGrice (1975)の提案を発展させ、トートロジー(4a)が意味論レベルで恒真命題(4b)を表すとしている。

- (4) a. War is war.
b. $\forall x (W(x) \rightarrow W(a))$ [(2a)型]

Levinson (1983)によると、(4b)が文脈と相互作用することにより、「戦争とは残酷なものだ。いちいち嘆いていても始まらない。」といった会話の含意が生み出される。この会話の含意の算出には普遍的な語用論原則が用いられる。このように、「トートロジーは意味論レベルで恒真命題を表し、普遍的な語用論原則により語用論レベルではじめて有意味な内容を伝達する」と考える立場はラディカル語用論と呼ばれる。

2.3 Wierzbicka (1987)

ラディカル語用論と対立する立場が Wierzbicka (1987)に代表されるラディカル意味論である。ラディカル意味論では、トートロジーの伝達する意味は普遍的な語用論原則により計算されるのではなく、個別言語の意味論において指定される。この立場に立つ Wierzbicka (1987: 109)は、トートロジー *X is X* のさまざまな用法の意味を記述したうえで、全用法に共通する意味として(5)を提案している。これは上の(2b)型の全称命題に相当する。

(5) "An *X* is not different from other *X*'s (All *X*'s are the same)."² [(2b)型]

ラディカル語用論とラディカル意味論は互いに対立する立場であるにもかかわらず、トートロジーが意味論レベルで全称命題を表すと考える点では共通している。

2.4 坂原 (1992)

坂原 (1992: 60)はフランス語のトートロジー *X ÊTRE X* (*X* は *X* だ)を二つに分類し、そのうち一つが(6)の解釈を持つと述べている³。これは(2a)型の全称命題である。

(6) a. *Mauvaise ou non, une peinture est une peinture.* (「下手でも絵は絵だ。」)

b. 「すべての *X* は *X* だ」 [(2a)型]

坂原によると、カテゴリー *X* のメンバー間の差異が問題となっている文脈で(6)の解釈を持つトートロジーが発話されると、*X* のメンバー間の差異の重要性が否定され、同質性が強調される。

2.5 Okamoto (1993)

Okamoto (1993)はラディカル語用論とラディカル語用論の間に行く穏健な立場に立つ研究である。トートロジーの中核的な意味が構成的意味論では完全に予測できないと考える点でラディカル意味論寄りであり、トートロジーの伝達する意味の一部が普遍的な語用論原則で計算可能である点でラディカル語用論寄りである。Okamoto(1993: 438-439)は(7a)のようなトートロジー「*X* は *X* だ」の中核的な意味はカテゴリーの不変性であるとし、(7b)のように述べている。これは(2b)型全称命題である。

(7) a. 何歳でも、どんな職業でも、恋は恋⁴。

b. "*X* in *X* wa represents any non-specific *X* and category immutability is claimed with regard to any non-specific *X*." [(2a)型]

2.6 Cadiot & Nemo (1997)

Cadiot & Nemo (1997)は、上記のような研究とは距離を置き、「*X* の特徴付け属性」という概念を中心にすえたトートロジー研究である。Cadiot & Nemo (1997: 133-134)はフランス語の(8a)のようなトートロジーに関して、(8b-c)のように述べている。(8b)では(2a)型全称命題の妥当性が否定され、(8c)では(2bc)型全称命題を用いてトートロジーの解釈が記述されている。

(8) a. *Une voiture est une voiture.* (「車は車だ。」)

b. 「『すべての車は車だ』というパラフレーズは単なるパラフレーズにとどまっているばかりか、恒真命題でもあり、解釈を正しく説明することがで

きない⁵。】[(2a)型の妥当性を否定]

- c. 「X一般について成り立つことはどのXについても成り立ち、ゆえに話題になっている特定のXについても成り立つ。」^{6,7} [(2b)型]

2.7 西川 (2003)

西川 (2003)は、関連性理論の立場から、Levinson (1983)らがトートロジーの会話の含意とした伝達内容を一部表意 (explicature)に組み込む分析を提示している。西川 (2003: 53)はトートロジー(9a)が(9b)のような表意を持つと述べている。(9b)の主語Aは、(9d)に述べられているとおり、全称的に解釈される。結果としてトートロジーは(2b)型の全称命題を表すものとして記述されることになる。西川の挙げている例は(10)である。

- (9) a. 発話 (Utterance): A is A
b. 表意 (Explicature): A is A*. (A*はAのアドホック概念) [(2b)型]
c. 高次表意 (Higher-level explicature): The speaker intends the hearer to know that A is A*.
d. 「一つめのAはその名詞によって表されるすべてのものを指している」
- (10) a. War is war.
b. 「戦争というものは(どんな戦争でも)、罪のない人を犠牲にする残虐な行為だ。」

以上から、立場の違いにもかかわらず、多くの先行研究がトートロジーの基本的な解釈を全称命題により記述していることが分かる⁸。

3. 全称命題による記述の問題点

本節では全称命題によってトートロジー解釈を記述することの問題点を論じる。

3.1 制限付き全称命題

トートロジーには、単に「XはXだ」と述べるのではなく、Xに関する条件Pを付けて「PならばXはXだ」と述べるタイプのもが見られる。これは「PであるすべてのXはXだ」という制限付き全称命題を表す。例えば(11a)は、(11b)が示すように、「すべてのねずみ」についての発話ではなく、「ねずみを取るすべての猫」についての発話である。

- (11) a. 醜くても醜くなくても、ねずみさえ取れば、猫は猫だ⁹。
b. ねずみを取る猫は、醜いかどうかに関係なく、すべて猫だ。

こうした用法の存在はトートロジーを直接全称命題と結び付けるアプローチにとって不利となる。例えば坂原 (2002: 112)は、トートロジーが「『すべてのXがXである』という解釈を持つ」と述べながら、坂原 (ibid.: 114)では、(11a)のような例を受けて、トートロジーが「『すべてのXがXである』と主張しているとは限らない」と矛盾した主張を行っている¹⁰。こうした矛盾が生じるのは、坂原が全称命題を出発点としてトートロジーの解釈を考えてしまったことが原因である。

この議論に対しては次のような反論が可能である。(11b)のような制限付き全称命題はトートロジーに限らず一般的に見られる現象である。例えば、(12a)は語用論的理由で(12b)のように暗黙の制限を伴った全称命題として解釈され、(13a)は統語構造のレベ

ルで明示的な制限を伴っており、(13b)のような制限付き全称命題として解釈される。

- (12) a. すべての猫が眠っている。
b. 「うちにいるすべての猫が眠っている。」(暗黙の制限)
- (13) a. 熊は青い目をしているときは賢い。
b. 「すべての青い目をしている熊は賢い。」(明示的制限)

このように、解釈の際に何らかの制限が加わるのは全称命題一般に見られる現象であり、これがトートロジーに見られても不思議はない、と反論することができる。

しかし、この反論は別の問題を引き起こす。トートロジーに制限付き全称命題の考え方を適用するとパラドックスが生じるのである。一般に、二つの命題 ϕ と ψ に関して、(14a)の含意関係は成り立つが(14b)の含意関係は成り立たないとき、「 ϕ は ψ より情報的に強い」($\phi > \psi$ と表記する)と言う。

- (14) a. $\phi \rightarrow \psi$ (ϕ は ψ を含意する)
b. $\psi \rightarrow \phi$ (ψ は ϕ を含意しない)

このとき、「論理的に ϕ が真でありながら ψ が偽である可能性がある」ことになる。例えば、「太郎と花子が来た」(=「太郎が来た & 花子が来た」)は「太郎が来た」を含意するがその逆は成り立たないから、「太郎と花子が来た」 $>$ 「太郎が来た」が成り立つ。これは、「太郎は来た」が成り立つが「太郎と花子が来た」は成り立たないような状況を考えることができるということにほかならない。これを全称命題(15a)と制限付き全称命題(15b)の場合に適用してみよう。

- (15) a. (世界中の)すべての猫が眠っている。
b. この部屋の猫はすべて眠っている。

(15a)は(15b)を含意するが、その逆は成り立たないから、「(15a) $>$ (15b)」が成り立つ。これは「(15b)が真でありながら(15a)が偽である場合がある」ということにほかならない。これが(12a)が制限付き全称命題として解釈される際の前提となる。すなわち、聞き手が発話(12a)を解釈する際、(15a)が偽であることを念頭に置いた上で、Grice (1975)の協調の原則に基づき、(12a)を(15b)のような制限付き全称命題として解釈するというのである。(13a)では、話し手の側が「熊は賢い」という主張では強すぎる(つまり情報量が大きすぎて偽である)ことを考慮し、明示的に「青い目をしているときは」という制限を加えることにより発話が表す命題の情報量を小さくしているのである。ところが、「すべての猫は猫だ」という命題は恒真命題であるから、情報的に最も弱く、はじめから偽になる可能性はない。したがって、明示的にであれ、暗黙のうちにであれ、そもそも領域を限定する理由はない。そこで、(11a)のような発話に制限付き全称命題の概念を適用することは、「あらゆる命題のうちで情報量が極小である恒真命題が情報的にさらに弱められる」というパラドックスを引き起こすことになる。制限付き全称命題の概念は、既存の問題を解決する代償として、別のさらに深刻な問題を生み出すのである。これは結局、トートロジーが全称命題「すべてのXはXだ」を表すという前提の疑わしさを物語っている。ただし、「XはXだ」が(2a)型全称命題「すべてのXはXだ」ではなく(2b)型全称命題「すべてのXはQだ」を表すと考えれば、このようなパラドックスは生じない。(2b)の「すべてのXはQだ」という全称命題は恒真命題ではないので、(12a)と同様に制限を加えて解釈しても問題はない。ゆえに、ここでの議論はトートロジー

が全称命題を表すという主張自体を反証するものではない。そこで次節では、トートロジーが「すべての X は Q だ」という全称命題を表すという説を反証する。

3.2 特称命題

トートロジーには全称命題ではなく特称命題を表す用法がある。(16a)は(16b)または(16c)のように解釈されるが、これは特定の個体 h が属性 H を持つ(H (h))という特称命題である。

- (16) a. この映画でもヒッチコックはヒッチコックだ。
b. この映画中のヒッチコックはヒッチコックらしく描かれている。H (h)
c. この映画中のヒッチコックはいつもどおりの演技をしている。H (h)

同様に、(17a-18a)はそれぞれ特称命題(17b-18b)を表す。

- (17) a. 太郎の絵でも猫は奇跡的に猫だ。
b. 太郎の絵に描かれた猫は実物の猫に似ている。C (c)
(18) a. 今日もやはりイチローはイチローだ。
b. 今日のイチローは普段どおりのプレーをしている。I (i)

トートロジーが全称命題を表すと決めてかかると、こうした特称命題の場合に対応できなくなる。

これに関しては次のような反論が考えられる。すなわち、「すべての X は Q だ」が成り立つならば、(X が空集合でない限り)全称例化により「特定の X は Q だ」が成り立つのから、これらの発話は全称命題による記述と矛盾しない、という反論である。これによると、(16b-c)、(17b-18b)のような発話は、「すべての X は Q だ」という全称命題を根底に持ちながら、そこから全称例化により出てくる「この X は Q だ」という特称命題に焦点を当てた発話であるということになる。この分析を反証するためには、(16b-c)、(17b-18b)のような特称命題が全称命題を経由して出てきたものではないことを示せばよい。(16b-c)、(17b)、(18b)においては、それぞれ「この映画以外のヒッチコック」「太郎の絵に描かれた猫以外の猫」「今日以外の時点におけるイチロー」のことは念頭に置かれていない。これはすなわち、これらの発話が「すべての X」を念頭に置いたものではないということである。したがって、これらの特称命題は全称命題を経て得られる命題ではないと言える。これを裏付ける事実として、(16b-c)、(17b)、(18b)がそれぞれ(19a)、(20a)、(21a)の発話と両立可能であるという事実がある。(19a)、(20a)、(21a)はそれぞれ(19b-c)、(20b)、(21b)の特称命題を表す。

- (19) a. 次郎の映画のヒッチコックはヒッチコックではない
b. 次郎の映画の中のヒッチコックはヒッチコックらしく描かれていない。
c. 次郎の映画の中のヒッチコックはいつもどおりの演技をしていない。
(20) a. 次郎の絵の猫は猫ではない。
b. 次郎の絵に描かれた猫は実物の猫に似ていない。
(21) a. ((18a)とは別の試合を見ながら)こんなイチローはイチローではない。
b. 今日の試合のイチローは普段どおりのプレーをしていない。

ある人物が(16a-18a)を発話するとき、その人物はそれぞれ過去に行った(19a-21a)の発言を取り消す必要はない。この事実は、(16a-18a)の発話が全称命題の否定「すべての X

が Q であるわけではない」と両立することを示している。ゆえに、(16a-18a)は全称命題「すべての X は Q だ」から全称例化によって得られる特称命題ではない。

以上から、全称命題「すべての X は Q だ」を直接トートロジーと結び付けるアプローチでは、トートロジーが特称命題「この X は Q だ」を表す場合に対応できないことが分かる。逆に、トートロジーを直接特称命題「この X は Q だ」と結び付けるアプローチでは、トートロジーが全称命題または制限付き全称命題を表す場合に対応できない。次節では、コンテキスト主義の考え方をを用いてこのジレンマを解決する。

4. コンテキスト主義的前提に基づくトートロジーの分析

前節の議論で明らかになったことは、文「X は X だ」を全称命題・制限付き全称命題・特称命題のいずれか一つと直接結び付けてしまうと、その他の二つの場合に対応できなくなるということである。このジレンマを解決するためには、文はそれ自体で特定の命題を表すのではないと考える必要がある。これが Recanati (2004)らによって提唱されているコンテキスト主義の考え方である。

4.1 理論的想定

以下では、Fauconnier (1985, 1997)および Recanati (2004)に基づき、(22)の理論的想定を行う。

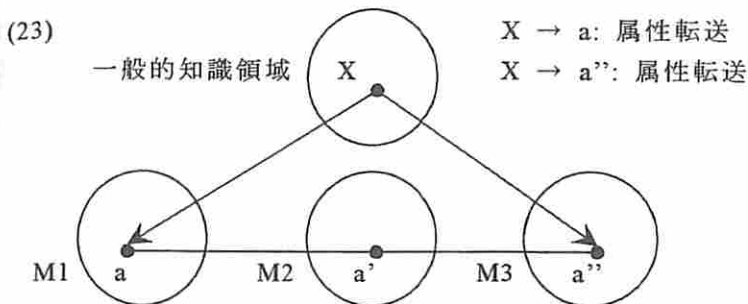
- (22) a. 言語表現はスペース(= 命題表示)構築のための部分的指令であり、スペース構成における情報転送等の認知操作はメンタル・スペース理論の公理に従う。
- b. 命題を表示するのはスペース構成であり、文ではない。
- c. コピュラ文「X は Y だ」の言語的意味は「X と結合された要素 a が Y と結合される」という操作であり、それ自体はいかなる命題にも対応しない。
- d. 複数の領域 $M_m \cdot M_n$ が問題となる文脈では、a が M_m の a と M_n の a' に分割表示され、a / a' がそれぞれ X / Y と結合される(酒井 2006)。
- e. 条件節・譲歩節はスペース導入表現である(酒井 2007, 2008)。
- f. 言語表現、コンテキストのいずれによっても内容が定義されないスペースは任意の状況を表すものとして解釈される。

「X は X だ」が X の同質性を表す(藤田 1988, 坂原 1992, 2002, Okamoto 1993, 酒井 2006)のは(22a-d)からの帰結であり、これをトートロジーの言語的意味と考える必要はない。

4.2 スペース構成とトートロジーの解釈

4.2.1 一般的スペース構成

(22)の理論的想定に基づく、トートロジー「(P でも)(Q ならば)X は X だ」が構築する一般的スペース構成は(23)のようになる。



4.2.2 制限付き全称命題の場合

(24=11a)においては、各スペースの内容は(25)のようになる。

(24) 醜くても醜くなくても、ねずみさえ取れば、猫は猫だ¹¹。

(25) (24a): X = 猫

a. M1 (任意の状況): 猫 (a)

b. M2 (譲歩節が導入するスペース¹²): 醜い(a') ∨ ¬醜い (a')

c. M3 (条件節が導入するスペース): ねずみを取る (a'')

これは、「猫である任意の個体 a に「醜い」(または「醜くない」)という属性を付け加えてできる個体 a' は、ねずみを取るという属性を満たす場合には、やはり猫である」という内容を表している。これはすなわち、「ねずみを取るという条件を満たす限り、猫を見た目で差別するのは不適切である」ということである。

(24)の断定は個体 a'' (= 猫である個体にねずみを取るという条件を付け加えた個体)を対象としており、猫全体については何も述べていない。他方、スペース M3 は特定の状況(状況トークン)を表すのではなく状況のタイプを表すから、文全体は制限付き全称命題「X である任意の個体 x に P という属性を付け加えてできる個体 x' は、属性 Q を満たす場合には、やはり X である」を表すことになる。

4.2.3 特称命題の場合

スペース構成(23)はトートロジーが特称命題を表す場合も適切に記述することができる。(26=18a)においては、各スペースの内容は(27)のようになる。

(26) 今日もやはりイチローはイチローだ。

(27) (26a): X = イチロー

a. M1 (普段の試合): X (a)

b. M2: 導入されない = 関与的でない

c. M3 (今日の試合): X (a'')

(27)が表しているのは、「普段の試合において a はイチローであり((23)において a と X を結合するコネクタによる)、a'' と a は同一個体であり((23)において a'' と a を結合するコネクタによる)、今日の試合において a'' は a と同様の属性を持つ((23)において a'' と X を結合するコネクタによる)」ということである。これは上の(18b)に示される解釈を正しく記述している。このとき、スペース M3 は今日の試合という特定の状況(状況トークン)を表すから、文全体は特称命題になる。

4.2.4 全称命題の場合

最後に、スペース構成(23)はトートロジーが全称命題を表す場合も適切に記述することができる。(28=1a)においては、各スペースの内容は(29)のようになる。

(28) 戦争は戦争だ。

(29) (28a): X = 戦争

- a. M1 (任意の状況): X (a)
- b. M2: 導入されない = 関与的でない
- c. M3 (任意の状況): X (a'')

(29)においてスペース M1 および M3 が任意の状況に対応するのは、「戦争は戦争だ」という文形式にも、この文が発話される状況にも、スペースを定義する要素が存在しないためである。この場合、想定(22f)「言語表現、コンテクストのいずれによっても内容が定義されないスペースは任意の状況を表すものとして解釈される」に基づき、M1 および M3 は任意の状況を表すことになる。(29)は「任意の状況において戦争の定義属性を満たす要素 a は、(他の)いかなる状況のもとでも、戦争の定義属性を満たす」という内容を表す¹³。これは全称命題「どんな戦争でも、その本質が変わることはない」と等価である。このように、トートロジーに全称命題を直接結び付けなくても、言語表現「XはXだ」と文脈との相互作用により、全称命題の解釈を正しく導き出すことができる。

4.2.5 スペースの性質とトートロジーの解釈の関係

本論文の分析では、トートロジー「XはXだ」はそれ自体ではいかなる命題も表さず、文脈との相互作用により(23)のようなスペース構成が構築され、その内容が定まった段階ではじめて具体的な命題が得られる。このアプローチでは、第3節で見たトートロジーの全称解釈と特称解釈は、トートロジー自体の性質ではなく、構築されたスペース構成の性質であるとみなされる。4.2.2-4.2.4節の議論から、どの解釈が得られるかはスペース M3 の性質によって定まることが分かる。これは(30)のように一般化できる。

- (30) a. M3 = 状況トークン → 特称命題
b. M3 = 状況タイプ → 制限付き全称命題
c. M3 = 任意の状況 → 全称命題

5 結論

この論文では次のことを論じた。

- (31) a. トートロジーがそれ自体で全称命題または特称命題を表していると考えれば、トートロジーのすべての解釈(全称命題・制限付き全称命題・特称命題)を記述することができなくなる。
- b. このジレンマを解決するためには、トートロジーがそれ自体ではいかなる命題も表さないというコンテクスト主義的な考え方を採用する必要がある。
- c. 言語表現と文脈との相互作用によりスペース構成が構築され、その段階ではじめて命題が表示されると考えることで、トートロジーの多様な解釈が適切に記述される¹⁴。

文が文脈と独立に命題を表すと考える立場は字義主義と呼ばれる。トートロジーに直接全称命題を結びつけるアプローチは字義主義に立脚していると言える。本論文の議論により、トートロジー研究は字義主義から脱却し、コンテキスト主義に移行するべきであることが明らかとなった。

注

¹ トートロジーを明示的に全称命題によって記述してはいないものの、事実上全称命題と等価なものと考えている研究として Grice (1975)[(2a)型を想定]と藤田 (1988)[(2b)型を想定]がある。

² Wierzbicka はこれを坂原 (2002)の言う異質化トートロジーを除くトートロジーが表す共通命題として提案している。

³ もう一つは「Xをそれとよく似た Yとはっきり区別せよ」という解釈である。二つの解釈のうちどちらになるかは X のステータスによって決まる。X がカテゴリー名であれば(6)の解釈になり、X が何らかのカテゴリー W のメンバー名であれば「Xをそれとよく似た Yとはっきり区別せよ」という解釈になる。

⁴ 原文はローマ字表記。

⁵ « [...] une paraphrase telle que “Toutes les voitures sont des voitures” [...] demeure une simple paraphrase, tautologique de surcroît, qui n’explique pas ce qui est un cause. »

⁶ « Dire “un x est un x”, c’est dire, à propos d’un x dont il est question, ce qui est vrai des x en général ne peut qu’être vrai de chaque x, et donc à son propos. »

⁷ Cadiot & Nemo (1997)は X に関して述べられている属性が X と非 X を区別する属性である場合(「戦争は戦争だ」とそうでない場合(「車は車だ」)とでトートロジーの用法が異なり、(8c)の記述は前者のみに当てはまると考えているが、ここではその区別は問題にしない。

⁸ 「基本的な解釈」とは大半の場合「言語的意味のみに基づいて得られる解釈」に相当するが、関連性理論によるアプローチである西川 (2003)ではこれは「表意」に相当する。

⁹ 坂原 (1992: 65)の仏語例文(Moche ou pas, un chat est un chat pourvu qu’il attrape des souris.)の和訳。

¹⁰ 坂原 (2002)によるこれらの記述が、単に言い回しの問題ではなく、実質的な矛盾を含んでいることを確認しておく。坂原 (2002: 112)は「トートロジーは『すべての X が X である』という解釈を持つ」ということを根拠にして、(i)の主張を行っている。

(i) 「2つの X が X に対する複数の視点を表すという考え方には無理がある」(ibid.)

他方、坂原 (2002: 114)は「[トートロジーは]『すべての X が X である』と主張しているとは限らない」ということを根拠にして、(ii)の主張を行っている。

(ii) 「別の条件を付け加えて別のプロトタイプカテゴリを作り、X のあるメンバをこのプロトタイプカテゴリから排除しても矛盾は起きない」(ibid.)

(i)が述べているのは、トートロジー解釈では、「X のカテゴリー化は必ず一つである(つまり、X のすべてのメンバーは等しく X である)」ということであり、(ii) が述べているのは、「X に対して複数のカテゴリー化を行い、X の中で『本当の X』とは呼べないメンバーを X から排除してもよい(つまり、X のすべてのメンバーが等しく X であるわけではない)」ということであ

る。これらの記述は明白に矛盾している。

¹¹ 坂原 (1992: 65)の仏語例文(Moche ou pas, un chat est un chat pourvu qu'il attrape des souris.)の和訳。

¹² 譲歩節・条件節が導入するスペース構成は簡略化してある(cf. 酒井 2007, 2008)。

¹³ 一般に(23)において X の定義属性は具体的に指定されていなくてもよいが、話者が例えば(1a)において「戦争(X)の定義属性=罪のない人を犠牲にする残虐な行為」と考えていれば、(29)は西川 (2003)のアドホック概念による記述(10b)と等価になる。

¹⁴ この論文ではスペース構成(23)が構築される過程の詳細は論じなかったが、言語表現と文脈との相互作用は Recanati (2004)の言う「第一次語用論的プロセス」に相当する。

参考文献

- Cadiot, Pierre. & François Nemo (1997) Analytique des doubles caractérisations, *Sémiotiques* 13: 123-143.
- Fauconnier, Gilles (1985) *Mental Spaces: Aspects of meaning construction in natural language*, MIT Press. 坂原茂、水光雅則、田窪行則、三藤博 訳『メンタル・スペース』白水社、1996年。
- Fauconnier, Gilles (1997) *Mappings in thought and language*, Cambridge: Cambridge University Press, 坂原茂、田窪行則、三藤博 (訳)『思考と言語におけるマッピング』岩波書店、2000年。
- 藤田 知子 (1988) 「Une femme est une femme —X ÊTRE X 構文解釈の試み」『フランス語学研究』(日本フランス語学会) 22: 15-34.
- Grice, Paul (1975) Logic and conversation, *Syntax and semantics* 3: 41-58.
- Jespersen, Otto (1924) *The philosophy of grammar*, London: Allen & Unwin.
- Levinson, Stephen (1983) *Pragmatics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Okamoto, Shigeko (1993) Nominal repetitive constructions in Japanese: The 'tautology' controversy revisited, *Journal of pragmatics* 20: 433-466.
- 西川 眞由美 (2003) 「Tautology の考察—ad hoc 概念の視点から」『語用論研究』5: 45-58.
- Recanati, François (2004) *Literal meaning*, Cambridge: Cambridge University Press, 今井邦彦(訳)『ことばの意味とは何か—字義主義からコンテクスト主義へ』新曜社、2006.
- 坂原 茂 (1992) 「トートロジーについて」『外国語科研究紀要』(東京大学教養学部) 40-2: 57-83.
- 坂原 茂 (2002) 「トートロジーとカテゴリ化のダイナミズム」大堀壽夫(編)『シリーズ言語科学 3 認知言語学Ⅱ: カテゴリー化』東京大学出版会: 105-134.
- 酒井 智宏 (2006) 「差異否定型トートロジー」、『認知言語学論考』第5号、ひつじ書房: 119-144.
- 酒井 智宏 (2007) 「マッチングと矛盾文の伝達情報」『日本認知言語学会論文集』7: 427-437.
- 酒井 智宏 (2008) 「マッチングとトートロジーの伝達情報」『日本認知言語学会論文集』8: 483-493.
- Wierzbicka, Anna (1987) Boys will be boys: 'Radical semantics' vs 'Radical pragmatics', *Language* 63: 95-114.

Tautology and universal propositions

Tomohiro SAKAI
(Keio University)

The purpose of this paper is to show that the semantics of tautologies of the type *X is X* illustrated in (1) should not be directly associated with universal propositions like (2a-2b), and that the linguistic meaning of *X is X* is reduced to partial instructions for the construction of a full-fledged proposition.

- (1) a. War is war.
b. Ugly or not, a cat is a cat if it catches mice.
(2) a. $\forall x [X(x) \rightarrow X(x)]$ (All X's are X's.)
b. $\forall x [X(x) \rightarrow Q(x)]$ (All X's have property Q.)

Many authors have described the meaning of (1) in terms of (2) (Levinson 1983, Wierzbicka 1987, Sakahara 1992, 2002, Okamoto 1993, Cadiot & Nemo 1997, Nishikawa 2003, etc.). This analysis, however, raises two problems. First, it cannot account for the occurrence of a conditional in (1b) above, which restricts the set of cats of which the predicate is true. This may appear at first sight similar to restrictive universal propositions such as (3), in which only some subset of cats is taken into consideration.

- (3) a. All the cats are sleeping. (e.g. All the cats in the room are sleeping.)
b. Cats are cute when they have blue eyes.

But this analogy gives rise to a paradox, given that the tautological universal proposition in (2a), the weakest of all the propositions, has no reason to be restricted by a conditional.

Second, the analysis that associates (1) directly with (2) contradicts the fact that *X is X* sometimes expresses particular propositions instead of universal ones, as in (4).

- (4) a. Today, Ichiro is Ichiro.
b. Even in Len's painting, a cat is a cat.

(4a) does not take into account occurrences of Ichiro on days other than today and (4b) talks only about the cat painted by Len. This shows that the propositions in (4) are not derived by universal instantiation from the universal propositions in (2).

The arguments above suggest that some analysis based on contextualism (Fauconnier 1985, 1997, Recanati 2004) is called for in order to fully describe the various interpretations of *X is X*. Our claim is that *X is X* constructs a space configuration in which Space M2 and Space M3 are set up by a concessive or a conditional with respect to the parent space M1. In M1 and M3, the same element *a* inherits the properties of X. The interpretation of *X is X* crucially depends on that of M3. If M3 represents a situation-token, then a particular proposition is produced. If M3 represents some situation-type, then a restrictive universal interpretation is obtained. If M3 represents an arbitrary situation, then a universal proposition shows up.